

書評 大阪青山大学短期大学部 「紀要」 39 ダヨ・オロパデ「アフリカ希望の大陸」
2017.12

書 評 Book Reviews

深尾幸市

ダヨ・オロパデ 著

「アフリカ希望の大陸—11億人のエネルギーと創造性」

英治出版 397頁 ¥2,200

近年アフリカに関する書籍は急速に増えてきた。遡れば2005年7月のグレンイーグルズ・サミットでは、貧困削減とアフリカ開発が主要議題となり、アフリカ支援が世界的テーマになった。以降政治、経済、社会、教育、資源、医療、開発、MDGs、SDGs・・・と多くのテーマに関して様々な人々によって議論・提言がなされてきた。今回取り上げる本書は、「全米注目のジャーナリストが各国に足を運び目にした、思い込みの向こうにあるリアルなアフリカ」を取り上げた。著者はナイジェリア系アメリカ人ジャーナリストで主に国際政治、開発政策を取材している。

本文は次の10章から構成されている。

1 方向感覚 2 カンジュ 3 しくじり国家 4 ほしくないもの 5 家族の地図
6 テクノロジーの地図 7 商業の地図 8 自然の地図 9 若者の地図 10 二つの公的機関

それでは少し詳しく見てみよう。

第1章「なぜアフリカの新しい地図が必要なのか」。「暗黒大陸」という言葉を生み出したのは、コンゴの旅について1878年に記したヘンリー・モートン・スタンリーだ。「ポルトガルとフランス、イギリス、ドイツを中心としたヨーロッパ勢力が自分たちの解釈で描いた地図を使い、勝手に国境線を引いてアフリカを切り分けようと決めたのも、この尊大さの産物であったわけだ。1884年のベルリン会議で、彼らは大陸にそれまで一切存在しなかった国境線を引き、タバコ、ピーナッツから石油まで、さまざまな天然資源を奪い合った。以来この国境線は、外国からの認識とアフリカの現実との間に横たわる埋めがたい溝であり続けている。」「テクノロジーの地図はサハラ以南でもインターネットと携帯電話の爆発的な普及はサービスの提供、情報の拡散、経済成長のまったく新し

い基礎を築き上げている。」「開発」とは「太っている（裕福である）」と「痩せている（貧しい）」という言葉で説明するとわかりやすいとは新鮮な表現である。

第2章「天才と犯罪者の間を歩く、アフリカ流生存戦略」。世界的に知られるようになった「ナイジェリア詐欺」マネーロンダリングを規制するナイジェリアの刑法から「419詐欺」でインターネット詐欺を働く何百何千という犯罪者がいるが、容認するわけではないが、新しいタイプの驚異的な起業家精神と見る。また、世界各地域で見られる都市の大渋滞、マニラやダッカ、取り分けラゴスのそれを「ゆっくりとしか動けない何千台という車の列は、このうえない商売のチャンスだ。『ゴー・スロー』と呼ばれるラッシュアワーには、水や果物、野菜、スナック菓子、携帯電話の通話時間や充電器、時には生きた動物までもが車の窓越しに買える。(中略) アフリカにおける商業活動の力強さを垣間見ることができる。」とは実にユニークな視点である。「カンジュ」とはアフリカの苦難から生まれた、独特の創造力のことであり、ヨルバ語の「カンジュ」（「精を出す」「努力する」）論理からの見方がまた独特で面白い。

第3章「アフリカの政府はなぜうまくいかないのか」。ソマリアは長年、「失敗国家」の代表格とされてきた。が、近隣のソマリランドの独立の経緯と独自の資産を使って食料危機から飢餓を回避し、海外支援や介入なしに「カンジュ」方式が成功した例を紹介している。中央政府の仕事に信頼し、正当性を認めているアフリカ人が、現実にはほとんどいない。「国家に巣食うハゲタカたち」。ケニア・ナイロビでの大統領選挙時の落書き。在職の指導者たちはスーツを着たハゲタカとして描かれ、汚れた金でいっぱいグリーンケースを手に、札束で作られた玉座に座っている。アフリカの官僚制度は、官僚たちが私腹を肥やすための建前提供する仕組みになっている。ナイジェリアは、長年にわたって国家予算の75%が政府運営費に回され、インフラや国民のためのサービスには25%しか残されていなかった。同様に、アンゴラでは石油まみれの潤沢な予算のうち、1998年に公教育および福祉に回されたのは全体のたった1%だった。崩壊した公共サービスの提供システムを説明するのに「しくじり国家(fall states)」なる言葉を使う。「悪い境界線は悪い隣人を生む」フラニ族という遊牧民族は西アフリカ17カ国すべてに住んでいる。アフリカ大陸は「収奪的」な体制を進化させてきた。DRC（旧ザイール）のジョセフ・モブツの例にみる国の鉱山から得た現金収入を支援者のポケットに直接ねじこみ、反対勢力を殺害・投獄し国際人権法をしばしば侵害した。シェラレオーネのシアカ・スティーブンスのダイヤモンド産業の国有化・私有化。カメルーンの大統領、ポール・ビヤもジンバブエのロバート・ムガベも乱暴な強盗のような手口で選挙を勝利してきた。選挙当日は平和裏に終了するが外国からの監視団が帰国すれば、政治家の約束はほとんどの場合、次の選挙が迫るまで保留され、政府の開発計画はろくでもないものになる。手厳しい各国の指導者の列挙である。

第4章「アフリカにとってのありがた迷惑」。「100万枚のTシャツ」古着はビジネスにとってはありがた迷惑だ。ナイジェリアの繊維産業は1997年13万7千人が働いて

いたが6年後には5万7千人まで激減した。その大きな要因が「太った国」から寄付された衣服だった。モザンビーク、ウガンダやザンビアでも衣料業界の労働者がこの古着の輸入に抗議してストライキを実行した。エチオピアとエリトリアは、古着の輸入自体を禁止している。Tシャツは「SWEDOW (Stuff の We Don't Want / ほしくないもの)」なのだ。ナイジェリアの繊維会社に駐在した経験を持つ評者として痛感する。海外からの援助こそ格差の原因である。援助金はすぐに被援助国の手をはなれ、スタッフの給料や日当、「手間賃」の形で世界銀行、JICA（日本）、DFID（イギリス）、SNV（オランダ）・・・と流れていく。「部外者が立てた計画」2000年に国連が壮大なミレニアム開発目標（MDGs）を宣言した。MDGsは外から内に向かって作られた。極度の貧困と飢餓を撲滅する。1日1.25ドルで暮らす人を基準に貧困を図っている。だが露天商、仕立屋、農家として働いていれば、収入は日によってまちまちだ。儲かる日もあれば稼ぎのない日もある。この指標は無意味だ。「外から内に向けた援助の仕組みは、さまざまな目標を相互に結びつけることに失敗した。目標1だけを取って見ても、「貧困」と「飢餓」の間のわかりやすい関係性は農業だろう。これが、アフリカではもっとも一般的な唯一の収入源だからだ。貧しい人々がもっともたくさんの質のいい食糧を育てられるよう支援することで、貧困だけでなく、アフリカや世界全体の不安定な食糧供給に対抗できるすばらしい防御策になる。だが、驚くべきことに、MDGsには農業への投資が含まれていないのだ。」「MDGsからこぼれた目標をいくつか挙げてみよう。たとえば、家族計画、若者の雇用、ITの導入、報道の自由なども発展にとっては重要な要素だ。」「行動する村」ウガンダ人作家でコンサルタントのテディ・ルゲ。「ヴィレッジ・イン・アクション」はMDGsの「ミレニアム・ヴィレッジ・プロジェクト(MVP)」を補完するような内容になっている。MVPの評価できる点は、本当の発展に必要な要件が相互に結びついていることを認識し、教育と医療、収入創出に取り組んでいることだ。「・・・生身の存在であって、ただのニュース記事ではない。私たちがどのように暮らしているのか。どのように生き延びているのか、どのように学び、育ち、どのように成功や失敗を知って欲しい。」本書は、「無政府主義を呼びかけるものではない。しくじり国家の文化を嘆く中でも、事態の好転を願うアフリカ人は数多い。暴君もいつかは死ぬ。断片的な改革もいつかは根付く。」諦めることなく息の長い努力しかないであろう。

第5章 「アフリカ人は元祖ソーシャルネットワークに生きる」。 アフリカの「家族の地図」には三つの特徴がある。第一の特徴は施しではなく、連帯だ。家族はプラス方向の結びつきを基盤としている。自分のまわりにいる人々の中で自分を認識するということだ。第二の特徴は痩せた国でも地域ぐるみの財政支援が根付いて無償の支援以外にも、ソーシャルネットワークは情報を効果的かつ迅速に伝える能力を持っているのだ。社会的なフィードバック・ループは貴重で柔軟性のたかいツールだ。近しさ、親しさ、信頼を活用した開発プロジェクトは、必要な情報をより早く広めることができる。私たちが「口こみ」と呼び、研究者は「近傍情報」と呼ぶ。第三の特徴は、連帯と地域に加えて、

範囲だ。街単位や居住区単位でアフリカ人同士を結びつける微細なつながりは、地球全体に広がる同族ネットワークも支えている。現在、アフリカから移民の地図は植民地支配を逆転させたような状態になっている。

第6章 「アフリカのデジタル革命に学ぶこと」。 急上昇する携帯電話普及率 通信衛星は世界中にインターネットと携帯電話の電波を届けている。現代の暮らしのあるとあらゆる側面に影響を与えている。アフリカでは、この接続性のおかげで何百万という人々が自分の属する地域、階級、宗教、文化の枠を超えて旅立って行った。携帯電話の契約者は5億人を超える。ケニアの「M ペサ」で携帯電話を ATM に変身させたサービスだ。クラスター経済、特定の産業に特化し、地理的な近接性によって進歩が加速している地域を指す。靴と言えばミラノ、車と言えばデトロイト、ギャンブルと言えばラスベガス、のような具合だ。シリコンバレーには IT 系の人材と資本が集まる。アフリカで最もうまくネットワーク化されたものがナイロビの「i ハブ」だろう。しくじり国家の多くでは、病気になり、病院や薬局、診療所、その他自分の行ける範囲にある医療機関に行けたとして、さらに医師が処方してくれたとしても、薬局に訪れる段階でまだ選択肢が二つある。有名製薬会社の薬かジェネリックか。アフリカの患者が服用することが多いのは有害な化学薬品か薄められて効き目のない薬か。有名製薬会社の薬にしても 2012 年の調査によるとナイジェリアで市場に出回っているマラリア治療薬は、食品医薬品管理局から登録されているにも関わらず、84.6%が偽物だったと判明した。テクノロジーは公平で、公式経済と非公式経済の両方を支えている。人間の欲望の前に人命が犠牲に。

第7章 「商取引から見えるアフリカの明るい未来」。 1998 年、経営学者 C. K. プラハラードとスチュアート・L・ハートがビジネス界に「ピラミッドの底辺 (BOP)」の消費者を初めて紹介した。BOP は世界でもっとも数が多く、もっとも貧しい人々を指す。だがアフリカの商業には三つの利点が内在している。商品取引自体が広く、商品やサービスの需要と供給に参加することができる。第二に、商取引にありとあらゆる意味で説明責任が伴う。第三に商取引はアフリカで雇用を生み、商品の流通を生むことが実証されたツールだ。この大陸の柔軟な市場は合法か違法かで定義するのは不可能だし、集合的なのか独立しているのか、国内市場なのか国際市場なのかさえあいまいだ。貿易は政治的境界線を越え、宗教や部族の境界線も越え、公式と非公式の境界も自由に越えていく。これは商業が、今も昔もアフリカのほかのどの側面とも異なる点だ。

MDGs が採択されてから 10 年が経ち、アフリカの多くの国が学費を無料にした。だが、その無料は結局書類上だけのことだった。学費が安くなっても、保護者は制服や教科書、給食、そしてときには学校の経営者への賄賂のための費用を捻出しなければならない。こうした隠れた費用が教育を最低貧困層の手の届かないものにしてしまう。アフリカの親たちは、非効率な公立学校制度をいつでも脱したいと考えている。私立校の先頭に立っているのが、ブリッジ・インターナショナル・アカデミーズだ。安価な私立学校のネットワークは、激痩せ方式で運営されている。校舎はベニヤとトタン

で作られ、上下水道どころか電気も通っていない。生徒たちは小さな黒板をノート代わりに使い、捨てられていた卵のパックやボトルのキャップ、輪ゴムでできた図形の学習用教材などを使って算数を学ぶ。アフリカ移民の貯金額は、世界銀行によれば年間 520 億ドルにのぼる。この資金源を活用すれば、従来型の融資を受けられないベンチャーにとっては革命である。

第 8 章 「アフリカの食糧と資源が世界を変える」。 アフリカ大陸は、電力問題に悩んでいる。安定した電力供給がない都市部では仕立て屋のミシンから建築業者の電気ノコギリまで職人たちは発電機に頼らざるを得ない。電力不足のせいで年間の GDP 成長率は 2.2% も低くなっている。ニューヨークの 1950 万人が年間消費する電力が、アフリカ大陸 8 億人分にほぼ相当する。近年取り組み始めたバイオ燃料生産への大規模な移行は、現在農業に使われている土地に影響を与えかねない危険な賭けだという点で専門家の意見は一致している。食糧にならないバイオ燃料植物でもほかの作物と同様に肥料と水、労働力は必要だ。アフリカの農業の衰退も著しい。アフリカは特に気候変動とそれに伴う砂漠化、害虫、外来種、洪水、霜、熱波、価格変動、飢餓の影響を受けやすい。訓練や資金、市場へのアクセスがない普通の農家は、生計を立てるのに大変な苦勞をする。農業部門を強化することはアフリカの人々の栄養と雇用にプラスとなるだけでなく、アフリカの農家は世界の食糧消費のバランスを取る一助になる可能性がある。現在、世界中で 15 億人が食べ過ぎている。一方、10 億人が飢えている。アフリカの農業は地元の貧困と飢えを解決できる他の地域に対して明白な価値を持った提案ができる。

アフリカの都市の人口密集は、公的にも個人的にも、資源の枯渇につながる。世界的な都市化から見て取れるのは限られた公共サービスと住居、限らない病気と犯罪のせいで発展できないスラム地区が共存しているということだ。ナイロビにはキベラ、ババ・ンドコ、ラゴスにはマココ、ヨハネスブルグにはヒルブロウとアレクサンドラがある。評者も現地を訪問しているが現況は想像を絶している。現場を見ることの必要性を痛感する。

第 9 章 「走り出すアフリカの新時代」。 アフリカの人口構造は若い。2012 年のロンドンオリンピックに参加した最年長の選手は 71 歳の日本人、最年少は 13 歳のトーゴ人。世界の人口は、実際こんな感じだ。日本やイタリア、アメリカなど太った国の平均年齢が上がっていく中、アフリカは人口ボーナスを享受している。大陸全体の平均年齢は 19 歳、サハラ以南のアフリカの総人口中 71% が 30 歳未満で、これは世界で最も高い割合だ。アフリカを強くする原動力は、6 億人近くいる 15~24 歳の若者だ。

ジテゲメー、『シュジャーズ』、ALA (アフリカン・リーダーシップ・アカデミー)、そしてブリッジ・インターナショナル・アカデミーズは、明らかに解決策が欠如している状況から、養育の自由をその手で作りだした。アフリカの若者世代のために、「カンジュ」理論を働かせたのだ。この中から ALA について触れて置こう。ALA は、アメリカの高校で学ぶようなことはすべて教えている。ALA はゆっくりと、確実に、将来アフリカの

役に立つであろう精神的なつながりを持つ、エネルギーに満ち溢れた汎アフリカ人ネットワークをはぐくんでいる。ALA はある程度の職業訓練もおこなっている。その内容は自律的思考と事業開発力の育成だ。また強迫的なほどの時間管理もある。アフリカの繁栄への切符は石油ではなく、鉱物でもなく、実践的スキルだと考えている。アフリカの経済にとって何より重要なのは、人材の開発と知識を基盤とする資本である。

アフリカにおける教育改革は、ただ教育の質が向上するだけにとどまらない。より良い教育はすべての子どもの健康を向上させる。また、若いアフリカ人女性が子どもを産む年齢が高くなることで、自己啓発と収入獲得の機会が増えて、労働者の技術が高くなり、経済が発展する。バーチャルではないリアルな学校は、食事や医療を含むさまざまな福利厚生を提供する最前線である。

第 10 章 「結局、誰に責任がある？」。 アフリカは今、岐路に立っている。何百万もの人々がなされるべきことについてビジョンを共有している。つまりは社会的、経済的、そして市民としてのエンパワーメントを、歴史的に疎外されてきた人々に与えるということだ。ここには女性の権利、フェアトレード、近代的教育、バランスの取れた消費、問題に対処する政治が含まれる。「二つの公的機関」、一方は「地域レベルの公的機関。これは人々のために働く、地域レベルで統治する。人々が自ら構築し、自ら罰則規定、自らの境界線、あなたの権利、私の権利を設定する。」1994 年の大虐殺後のルワンダの機能する国家について言及している。ルワンダ政府も内紛から這い出そうと努力している。政府は数々の改革をしてきた。教育と事業の公用語はフランス語から英語に変更された。子どもの教育は 3 年長く学校へ行くよう義務付けられた。国民皆保険の運用。環境破壊の脅威に対応して、この国ではビニール袋が使用禁止だ。制服を着た女性たちが首都キガリの道路を毎日掃いている。バイクタクシーの運転手たちは反射材つきのベストを着て、身分証書と乗客用のヘルメットを必ず携帯する。犯罪はほぼ存在しない。この国の女性政治家の割合は世界最高だ。生き残った女性たちは、国を再建しなければならない時にまわりに男性がいないことに気づいた。ルワンダの再建プロセスを加速させるためにカガメ大統領は「アガシロ」という哲学を採用した。「自立」「尊厳」を意味する。独裁主義と個人崇拜が併存するが、リベリアの「二つの公式制度」の見事さは、その互換性だ。国民はいつでも、一方の制度からもう一方の制度に乗り換えることができる。伝統的制度での判断が無視されれば、当事者は公式な司法制度に頼って解決策を求めることができる。同時に存在し、実質的に相互依存の関係にある。

簡素な GPS 機器と「オープンストリートマップ」を武器にキベラの詳細な地図を作成し住民向けに事業サービスの名簿まで作った。キベラの建物をマッピングしたうえに、デジタルの地図を何層にも重ねて、医療、教育、安全、土地利用の情報が判るように記した。この地図には 21 世紀のアフリカにおける新たな物語が凝縮されている。国家よりも小さな宇宙を定義しつつ、大きなことによるとグローバルでさえあるコミュニティを住民たちの定義で地図に描きこんでいるのだ。これらの地図は「何が可能か」という方

程式を変える力をもつ。「普通の人にとって何が可能か」という方程式だ。そして、「ほしくないもの」と比べると、この普通の人々の変化が、アフリカの希望ある未来に欠かせない基本的な材料なのである。2015年7月の国連による「世界人口予測」によれば、35年後の50年には世界人口97.2億人に対しサブサハラ・アフリカは21.2億人(21.8%、現在は13.1%)。人類の5人に1人がアフリカに住む。豊富な資源と「人口爆発」の時代に突入するアフリカから目が離せない。

著者 : ダヨ・オロパデ (Dayo Olopade)

イェール大学で法学士号、経営学修士号を取得。

ナイジェリア系アメリカ人ジャーナリスト。国際政治、開発政策、テクノロジーを取材している。ワシントンとナイロビで特派員を務め、『アトランティック』誌、オンラインメディア『デイリー・ピースト』誌、『ニューヨーク・タイムス』紙、『ワシントン・ポスト』紙などに寄稿している。

訳者 : 松本裕 (まつもと ゆう)

オレゴン州立大学卒。訳書に『アフリカ動き出す9億人市場』『社会的インパクトとは何か』『ビジネスモデル・エクセレンス』など多数。

英文 : The Bright Continent—Breaking Rules and Making Change in Modern Africa

Dayo Olopade